

江戸時代人の歯から現代を視る
新潟県立看護大学・看護・人類
藤田 尚

江戸時代は我々にとってかなり身近な時代である。しかし、身近であることが逆に禍するののか、「古いもの好き」の自然人類学者の関心は一般に低かったと思われる。だが多角的に研究の視点を持つほど、江戸時代人の歯は極めて興味深く、現代に生きる我々にも重要な示唆を与えてくれる。

東京大学および国立科学博物館に所蔵されている江戸時代人の歯および歯槽骨等を観察した結果、齲蝕は壮年で7%、高齢者で18.8%と明らかに加齢による齲蝕率の上昇が認められた。しかし、全体としての齲蝕率は12.1%とそれほど高いものではない。縄文時代人の齲蝕率が8.2%であるから、その後の齲蝕率の変遷を考慮しても、日本列島人の齲蝕率は、3000年ほど前から、著しい変化はなかった、と言えそうである。一般に弥生時代に農耕が伝播し、齲蝕率が上昇したと考えられてきた。しかし、過去10年にわたる韓半島での古人骨の調査から、当然農耕を知っていたはずの人々の齲蝕率が、6.4%（靑島人骨；日本の弥生時代中期に相当）、8.1%（禮安里人骨；日本の古墳時代に相当）と決して高頻度ではないことが明らかになって来ている。齲蝕の発症部位は、筆者が従来指摘してきた通り、根面齲蝕の比率が62.2%を占める。これは、歯周病によって歯槽骨が退縮し、エナメル質よりも弱いセメント質部分に齲蝕が発症したものと考えられる。一方、演者らの研究で、江戸時代人の咬耗度は、縄文時代人よりも明らかに軽度化しており、咬合面齲蝕が歯髓腔深部まで進行した個体も散見された。これは、江戸時代人が現代人程ではないにせよ、軟食化が進み、咬耗が軽度になったために生じた現象と捉えることができる。

歯の叢生がかなり頻繁にみられるようになるのも、江戸時代人の特徴と言って良い。それ以前の時代、就中、縄文時代人では、歯の叢生は全く見られない。恐らく軟食化などの江戸時代人に原因が求められるのであろうが、歯冠サイズは短期間に変化しないものとの仮定に立てば、顎骨の形態変化や小型化によるものであろうか。この点についての形態学者の研究を切望する。

江戸時代人の残存歯数は、熟年期までかなり維持されており、壮年期には2本程度しか歯を失っていない。また、熟年期でも5本程度の喪失歯数であり、「昔の人は歯を早くから失っていた」とする見解は、全般的な外れであることが証明された。しかしながら、老年期になると喪失歯数は一気に上昇し、30本ほどを失っている。この現象は、江戸時代人の歯の喪失が、齲蝕を原因とするものより、はるかに歯周疾患に因るものであることを窺わせる。すなわち、壮年期から歯周疾患に罹患し熟年期にはさらに重症度を増したと思われる。そして、老年期には、歯を維持することができなくなり、一気に喪失率が高まったと考えられる。鈴木尚らによる鎌倉材木座の出土人骨では、合戦による死亡者故、比較的若い個体が多いせいか、江戸時代人よりも更に喪失歯数は少なくなることも、演者によって確か

められている。また、東京医科歯科大学の窪田金次郎らによって、ナイジェリア人の口腔衛生の報告が1993年になされているが、窪田らは、現代的な歯科医療が必ずしも受けられないナイジェリア人がむしろ軽々と8020を達成していることを指摘している。演者は、2012年夏に英国ケンブリッジ大学の資料の中に、1911年に収集された近代ナイジェリア人の歯を調査する機会を得たが、齲歯は全くなく、喪失歯数も低い値であったことに驚いた。まだまだ、様々な時代、様々な国の個体を調べなければ最終的な結論は出せないが、恐らく、歯周病を若年期から抑制し、罹患者には適切な歯科治療を施すことが、8020を達成するポイントであると予想される。現代歯科医療が発達した我が国において、むしろ8020がなかなか達成できないのは、何とも皮肉なことである。

最後に、歯の人類学だけではなく、自然人類学全体のことに関及することをお許し願いたい。基礎科学を軽んずれば、およそ応用科学の分野でも衰退していくものと想像されるが、実際には、基礎科学と応用科学では、研究者のポスト数や研究資金の面で大きな開きがあることは明らかであり、その現実は一とまず受け入れざるを得ない。とすれば、人類学は、単に古いことを明らかにする学問であるだけでなく、現在の医療を始めとする諸科学と協働し、貢献を図ることも考えて行かねばならない。われわれ人類学者が扱う資料は数百年、数千年、時には数百万年前の古い資料である。しかし、そこから得られた情報は、非常に貴重かつ新鮮なものである。今後は、このような古い資料から得られた「新しい知見」を現代社会にどう活かすか・どう結び付けるかが、一つのしかし大きな自然人類学の課題であると思われる。自然人類学の末永い発展の方策を、我々研究者一人一人が真剣に考える時期に差し掛かっている。まさに、「古人骨を通して現代を視る」ことが求められているのである。